

| | |
|------------------|---|
| Title | 辺境開発とツーリズムに関する文化人類学的研究： インド・ブータン国境地帯の事例から |
| Sub Title | |
| Author | 脇田, 道子(Wakita, Michiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2012 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.74 (2012.) ,p.109- 112 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成23年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000074-0109 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トム」の発車メロディーの例も挙げてよい。こうして、駅の音環境と商売との関係が強いのは発車メロディー（「駅メロディー」とも言う）である。

従って、発車メロディーが輸送事業から象徴的に独立される傾向が見られる。その文脈は多くの著者が指摘した「ラス・ベガス化」（BÉGOUT, 2002）、「ディズニー・ランド化」や「魔法化された空間（enchanted space）」（AGAMBEN）、「付加価値化」（BAUDRILLARD）等、つまり都市空間の消費至上主義だと思われる。他方、45秒のベルが「けたたましい」と以前からも感じていた人がいたが、国鉄の民営化と同時に高まっている（音）環境のアメニティの意識で、特に1980年代から、マスメディア（新聞）でも文句や批判が現れる。

参考文献

- BÉGOUT, Bruce. Zéropolis. Paris: Éditions Allia, 2002.
小勝, 健一. 『車掌の口, 乗客の耳: 車内放送のメディア文化史』北海道大学, 2010.
田中, 大介. 「車内空間の身体技法」『社会学評論』58.1 (2007): 40-56.
田中, 大介. 「通勤通学する身体の形成」『ソシオロギス』29 (2005): 180-98.
橋本, 毅彦. 『遅刻の誕生. 近代日本における時間意識の形成』東京: 三元社, 2001.

辺境開発とツーリズムに関する文化人類学的研究： インド・ブータン国境地帯の事例から

脇 田 道 子

1. 研究目的

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州（以下、アルナーチャルと略す）のタウン、そして国境を隔てたブータンのサクテン、メラは、それぞれの国家の中でも開発の遅れた辺境地帯にある。インド側のモンパ（Monpa）、ブータン側の牧畜民ブロクパ（Brokpa）と呼ばれる人たちは、類似の民族衣装や文化伝統を共有しているが、いずれもそれぞれの帰属する国家の中ではエスニック・マイノリティとして存在している。両地域ともに、最近になってツーリズム開発の対象地として注目されはじめたが、その実態と問題点を文化人類学の視座から明らかにすることが本研究の目的である。

本研究は、博士論文の研究テーマである「モンパの民族表象と伝統文化の動態に関する文化人類学的考察—インド、アルナーチャル・プラデーシュ州を中心として—」の一部を構成するものである。ブータン東部のツーリズムを取り上げたのは、国民国家と近代化のはざまにあるモンパを隣国ブータンの辺境に住むブロクパと対比することによって際立たせることができると考えたからである。

2. 研究概要

本年度は、2回の現地調査を行った。第1回目は、7月26日から9月1日までの38日間、アルナーチャルを中心としたインドでの現地調査、および資料の収集を行った。アルナーチャルが外国人観光客を初めて受け入れたのは1992年のことであるが、西部のタウン地区は、軍事的な理由からそれより遅れて

1998年に開放された。ツーリズムの発展には、インフラ整備が不可欠であるが、道路、航空路、宿泊設備などのどれをとっても未整備な状態が続き、ツーリズム停滞の大きな要因となっている。

アルナーチャルが中国との未解決な国境であるマクマホン・ラインとアッサムとの境に引かれたインナー・ライン（内郭線¹⁾）に挟まれているという地政学的な状況により、他州からの投資が制限され、軍事優先の開発政策がインフラ整備の遅れの背景となっている。またこの二つの境界線があるためにツーリストの入域にも制限が設けられている。

それに加え、2011年4月にタウンにおいてヘリコプター墜落事故が2回続き、1回目の事故では国内からのツーリストが、2回目の事故では州の首席大臣（モンパ出身）が犠牲となり、現在も運行中止の状態が続いている。その後、夏から秋にかけては、故首席大臣の後継者選びを巡って、民族集団間の争いが表面化し、州都をはじめとして各地でゼネストが続き、それがしだいに暴力を伴うものになり、一時は暴動状態となった。その後、後継の首席大臣が交代し、騒乱は静まったが、その後もゼネストは繰り返され、州の不安定化を招く要因となっている。その背景には、州が多くの異なるトライブから構成されていることがある。この「トライブ」は、インド憲法で教育や雇用面での優遇政策の対象として指定された部族集団「指定トライブ」(Scheduled Tribe: STと略される)のことで、STはインドの行政用語である。しかし、押川²⁾が指摘しているようにアルナーチャルを含む北東諸州とその他の地域とでは同じSTでも大きな違いがある。その違いのひとつは「その地域においては多数派である」ことである。アルナーチャルの場合には、25に大別されるSTが州人口の64.22%（2001年）を占めている³⁾。州単位で取り組まなくてはならない問題についてもトライブ毎にさまざまな異議が唱えられてきた。モンパの場合にも、数年前まで「モン自治権要求運動」が起こされていた。州内の人びとが一枚岩となれない状況もツーリズムの足かせになっている状況が明らかになってきた。

2回目の現地調査は、11月22日から1月5日まで45日間のブータン、インドでの調査である。ブータンでは2010年9月から東部山岳地帯のサクテン、メラの二つの谷が外国人ツーリストに開放された。その後の経過を首都の政府観光局や東部の町で取材した。この地域のツーリズム導入に関しては、その開始前に筆者も考察を行っている⁴⁾。国家の開発計画の一端としてのブータン東部開発であり、東部には国内線用空港建設も始まっていた。しかし、東部にはツーリストにアピールできる文化資源が乏しく、もっと魅力ある観光スポットが必要であった。その点、長い間禁断の地であったサクテン、メラなら新規のツーリストだけでなく、リピーターも期待できる⁵⁾。一般のブータン人とは異なる民族衣装を着た牧畜民の文化が観光資源として注目を浴びたのである。地元への経済的な還元については、筆者は悲観的であったが、政府観光局はその点に関しては考慮を示し、地元の人びとをガイドやコックとして雇うことを義務づけている。だが、実際には、それが守られていないケースが多いことが地元の人やツーリストへの取材から明らかになった。

2012年になって、サクテンに電力が引かれた。間もなくメラにも引かれる予定だという。現在は山道を1日～2日歩かなくては到達できない山岳地帯の村であるが、道路建設も始まり、数年後には大きな変化が予想されている。携帯電話もすでに通じるようになっており、いずれテレビやインターネットも導入され、プロクバ社会は大きく変貌してゆくであろう。しかしながら、これらの情報機器をビジネスにうまく利用することにより、チーズやバターなどの乳製品の供給や通婚などによってアルナーチャル側のモンパとも太いパイプを持つプロクバが、ツーリズムや交易の推進役になる可能性もある。こうしたグローバル化の流れの中での変化の動態をブータンの中央からではなく、アルナーチャルを含めた

辺境からの視座で観察してゆく必要があると考えている。

このブータンでの調査の後、12月に再びアルナーチャルを訪れ、新しく就任した州の観光大臣とブータンとの国境に近い、タウンのルムラ（Lumla）選出の州会議員に面接し、取材した。現在ルムラからブータンとの国境まで道路の建設が進んでいて、アルナーチャル側はブータンとの国境が外国人にも開くことを望んでいる。しかし、軍事的にも重要な地域であるので、その実現は容易ではなく、その時点では、ブータン政府からの積極的な同意は得ていないとのことであった。地元のモンパのコミュニティが経営するコミュニティ・ベースト・ツーリズム⁶⁾の実例もいくつか見てきたが、それを設置したWWF（世界自然保護基金）インド支部が目指すものと地元の人びとの意識とのズレがあり、持続が疑われた。

この調査中にも、州都でゼネストがあり、日程を変更して終日宿舎に留まらざるを得ない事態となったが、閉店している店を暴徒が襲い、商品を略奪するといった情報が届いた。こうした治安の悪化は、過去にはほとんどなかったことである。州都からタウンに向かう際には、途中の峠が大雪でチェーン無しの車では越えられず、あきらめてアッサムへ引き返すツーリストの姿を見かけた。その帰りには、インド人ツーリストを乗せた車が同じ峠付近の雪道で滑り、崖から転落する事故に遭遇した。数人の重傷者が出たが、救援を呼ぼうにも電波が届かないため電話が通じず、危うい状態であった。夏には大雨、冬には高地では積雪があるにもかかわらず、それに備えた道路整備や安全対策、救援対策が遅れている様を目の当たりにした。

筆者の帰国後、2012年2月に世界的な旅行ガイドブックを発行しているロンリー・プラネット社がアルナーチャルを「2012年に旅行したいトップ10の地域」のひとつに選んだことが州政府に伝わった。「最後のシャングリ・ラ」と呼ばれるようになった州は、それを起爆剤にツーリズムを発展させようとい意気込んでいる。しかし、州が抱えるさまざまな問題と「シャングリ・ラ」のもつ「楽園イメージ」とはほど遠い。また、シャングリ・ラの持つ仏教的イメージも非仏教徒が多数を占める州の実情とは合致していない。タウンなどのモンパ居住地はこの「シャングリ・ラ」の代表的な場所として取り上げられているが、マクマホン・ラインに近いことから立ち入り禁止地域も多く、電力不足も深刻である。また、ツーリストにアピールし得る観光資源を持ちながらそれをうまく利用できないでいる。こうした「シャングリ・ラ」イメージと実際とのギャップを現地がどう埋めようとしているのかはまだしばらく観察が必要であるが、現時点での考察を「シャングリ・ラへの挑戦」というタイトルの論文にまとめ、社会学研究科の研究紀要に投稿中である。今まで調べてきたことを通して、できるだけの考察を行ったつもりである。⁷⁾

インド、ブータンのこの二つの地域でのツーリズムは、まだ始まったばかりで、その結果を論じることはできないが、ツーリズムについて考察することにより、州が抱えている問題があぶり出されてきた。

それらを整理し、分析を加え博士論文に生かして行くつもりである。

なお、ブータン東部のツーリズムに関しては、2011年5月に第1回日本・ブータン研究会そして2012年3月に東洋大学国際研究センターで口頭発表を行った。

注

- 1) イギリス植民地政府が1873年に引いた境界線。現在も残され、インド国民であってもアルナーチャルへの入域には許可証の所持が必要で、たとえ許可証があっても永住や土地所有は禁じられている。

- 2) 押川文子1981「独立後インドの指定カースト・指定部族祭作の展開」『アジア経済』22号1巻, 26-45頁。
- 3) 1961年センサスでは, STの割合は, 88.67%であった。この減少は他州からの移住者が増えていることを示している。
- 4) 「ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察: メラとサクテンの事例から」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』70号, 31-53頁, 2010年。
- 5) その政府の思惑通り, オープン前の2009年には16人だったサクテン, メラへのツーリストは, 2010年には, 128人, 2011年には143人と増え, 空港も完成したので, 今後も増加が予想されている。オープン前には, 特別許可を得た少数の外国人が政府の客として入域することができた。筆者も2006年から3年連続で訪れている。
- 6) Community Based Tourismとは, ツーリストを迎える側のコミュニティが中心となり, コミュニティの利益を守り促進するためにツーリズムを開発の手段として用いることと解釈される。

オランダ領東インドにおける日本人売薬商の研究

アストゥティ・メタ・スカルプ

研究のねらい

本研究は, オランダ領東インド時代の日本人社会の歴史の中で, 1900年代ならびに1910年代, つまり初期のころの商業移民の活動に焦点をあて, 彼らの実態を分析し, 日本, インドネシア, オランダの三者の関係における歴史的な意味を探ろうとするものである。

戦前期の日本人の中で, 日本人の商売の形態は, 行商と固定商店の2つのタイプがあったことが特徴的であると指摘している [Post 1991: 167]。本研究はそのうち行商人に注目する。行商人はマッチ, 櫛, 糸, 陶器, 薬など日常生活用品を大きな行李に入れ, それを現地で雇った現地住民たちに天秤棒で担がせ, 街から街へ, 村から村へと売り歩いた。筆者は, 彼らが売り歩いた商品の中で, もっとも重要な意味を持ったものとして, 仁丹や目薬などの庶民向けの薬に注目した。

1900年代から1910年代の日本人売薬商に焦点を当てるのは, この時代に取り扱われていた多数の日本商品の中で, 仁丹などの薬が占めていた割合が非常に多いということに加え, 彼らがオランダ領東インドにおける日本人コミュニティの基礎を築き, インドネシア「原住民」社会との密接な接点を持つ上で重要な意味を持ったと思われるからである。

研究内容

1900年代から1910年代の日本人売薬商に焦点を当てるのは, この時代に取り扱われていた多数の日本商品の中で, 仁丹などの薬が占めていた割合が非常に多いということに加え, 彼らがオランダ領東インドにおける日本人コミュニティの基礎を築き, インドネシア「原住民」社会との密接な接点を持つ上で重要な意味を持ったと思われるからである]。

それまでの「からゆきさん」や, 博打うちや女衞^{せげん}1) などとは違って, この人たちは, いわゆるまっとうな職業に従事する最初の日本人移民グループであって, 当地の日本人コミュニティを形成する役割を果たした。すなわちこの時期の売薬商の商業活動は, これ以後の時期, 「トコ・ジュパン (Toko Jepang)」(文字どおりの意味は「日本の店」)と呼ばれてインドネシアの原住民から愛着をもって受け入